

うきつ法法をたむけ説きふ阿羅漢者は侍者として侍ま
はる法法をたむけせむ世尊弟子にして時たま世四方にゆくおぼ
しはてありく乃國王及人民を化益せむ時たま又諸の分道
を降伏しむきと風小宗本たなびきほむやうおそおほし法法
六羣比丘は事小拵切し強ひがほ家時夏たあとな家子ありと
うふり思ひの外に多きうなるま事おほきほむ衣鉢坐具等
と銭流し失ひぬふと身人見を見せ外道は三月安居す
家を如来は弟弟子時を志ありむに捨びほむきて衣鉢等を
かき失ひぬふ形どぞいひそむるま家世尊此縁をまらして三時
安居を制し強ひぬふ菩薩戒小宗の此安居中おほきにみる要期を立

て道業小進ことわめ佛在世は安居たたら免ふはれまゆて
おぼせし人交竟は別法ありぬふ時多きは阿羅漢にたほ金
戒清淨法法といふとまらふとそ阿羅漢と手世尊羅蘭城
におそしま才ありと手に頻婆娑羅王園堂たうよりとるおほ
見のふく人あまきゆきし梵士聚舎才何事ならんとおぼ
して法おほ法いふとせむ人此城中梵士月三夜日を定
はるまわ侍るま人むあり日と往來しきたらぬといふおほ
形どしてあひ愛念し侍家や養に王堂を下らやぐて世尊若
みことにあらむとまは法法を制し白く奉つまふ此城中月毎三夜

つゝもろく此梵士集會一諸人往來一志堅人と稱す其子志一
み飯食をばくふなど一といひておぼやうふきあひあへり世尊勅一
あひて諸乃大徳も又是ふまゝに月廿四日十五日とに集りて以
て人ををもゆきてせしめ給ひて人付らんやとおほを付りて一許さ
せむはく蒙る君半信とてた素ら集りて王付りてとさめり世尊ま
のせむい然徳とて王の徳をさるまはせむは王是をさるまは阿を
称一退きいでるふ世尊此縁よるまて比丘僧を阿のめはせむは
王は諸もまひはまを徳さるひ今より月之廿三日梵士乃集り
よおろひ集りて諸人をさゆきてせはせよといはせむはせむは
ふとるまてこの日小戒のまはみま来り集りての頻婆娑女羅王と羣

後と共おぼやうではせむはまろふ人のあひままた家小僧尼も然徳と
して坐一の長者形もはたすまて説法さるふよといひ奉れり
あへていせむは世尊はまをさるひ説法を許させむはこれ
そは日は集りては法を説きさるふよといふぞなり今其後世尊
又念下の戒学は為小戒を説きまを制一の法をさるの縁事
アそ後ふと白月黒月に一交りて戒をとくあを制一のふこれ
アまて七夜共小各自ら戒持犯を志り他人に持犯を志り犯せ
はことあまばむは治罰一も一懺悔一清淨に和合一住する
それ説戒布薩といひ此法を制させむはて後は此布薩をさ
め家人のあまを戒を犯せばなかり此法を犯す乃命をつぐむと

おぢれをうらからぬ事にはなんの事も三世諸佛の業法におか
ませが現在に縁起をまらして割せはせぬ事とせざらざる
または又波斯匿王に縁おちりてはるれ國王は為よ仁王強をと
うせぬ事提希夫人は世尊をいひてはるれ六親無量壽種
をとせぬ事極果國土往生はたはく為よは無量壽經阿彌陀經
形を説く事目連者母は鐵鬼の中に何法をなげきぬ
は孟蘭盆強をとせぬ事阿形むき者三日のうち命終は相
らるれ事ばあ乃命をたぬたあ子施餓鬼はたはりをはるれ
たせぬ事又此者者事すはせぬ事はせぬ事はより摩訶迦女
きん奉りて先梵天に呪をたははるれ事は家これが為に禁

戒をたぶらぬ事とす縁を法説して首楞嚴に強をと
のせぬ事此法はか縁縁ふらして説せぬ事みはるれ事
に出家た弟子乃魔道おちり入んあををうたうませぬ事
あまをすむひの事とてうすくともおつせぬ事はるれ事
しうまをくも覺えな事今来法は世の中修禪乃人なる事
あまはるれ事らひもまはんと出た家もははかへらにすお
おすれはぬ事奉法を法強ひて之者た為よは光の真言の
法を説せぬ事とて此真言はるれ事はるれ事はるれ事
ふちらぬ事おまもまもれど阿字本不生不可得はとあり三密
相應極大秘密法をうたはるれ事唯仰ぎ信ドまらぬ事

亦やかく虎生れんきふ随ひ縁にまのせはとらにいふべき又此れを説
のふ大小乗一切経を三義の中れ強弱と仰ぎせざる成道より十二
集其中八聖僧れ多くて一とありきよるれど其後々化位れ僧もれ
ちもせば過ちとなきしむ何んぞはまじくおまめ事れ事に随ひて
法弟子を教はせざるはゆゑ世の中のだんちのいひつなふと思ふ
をんねご成をゆ縁やうむでおうま奇め法ならぬけしを流きた
まふ人あまはふ乃衣をきほし力もあま今より後獲羅錦綺
此袈裟衣をけげぬ芭蕉布わせうふ又樹皮草花葉もどをとりけ
はふはくらぬ色は五大色五同色もどの世れ人乃ううくやめて
ちのふ色になんも三たぬは色になんも木葉樹菩提樹もど

此皮をとり條よ又菓をとり條よたりおぬかたてよ縁こといひく
たがよはのひきた條を流ひてちあきおぼよもををせよん
大まおのひちひそくも他らば是各所けしけをとりあてはくま
と者とまはかんまなをよいんが姪女れごうすもせんひつがれ又ま
うまはれやままたなをまきめうへ一おぬきたまひ志願をまやみ
まも俗人れやうにいと多畜いざれが道れともたなきひぬくよ身をあ
らまされたる三衣を更持せよも一何まゆ乃衣あふはふよりうて
あんとよ金銀た宝は手にとりはま自らたくんざれ淨人居する
とに爲しぬはふたまたふ條こを許せぬふあどおまゆ一立居
ふりきてまへんせぬのまはれ人の友をぬぬあぬに戒律たあとは

宗青心は律儀りうぎなること家無きあはなむといふことありき事
ぞう此國よりけしむ此制道法をまもる放逸ほういつを家人位
あるも位なきもあ乃法式ほふしきに随ひて罪つみせらるべしあらむやこれ
は佛結持弟子ともあり出家せし人その制道法をよむむ律
儀をおろそあして放逸なる家は佛法中乃罪人あり僧を
し教ふいふまにならんやそ乃師を人のまにせんげ清淨律
儀子歸すきき家にあらずといふことせむ在家ざいけも出家も佛法を信
ししんせむ志願家人を出家し理をおもひて家無きぞう此
律藏りうざう乃此目れ中に侍りて今の世までも住持乃三寶をたも
おはしむすこれみる此國は神託法をよむとあ乃まよはすこれしせ

あは家一もあおむしき家昔より世に出家も破戒こわがい人な
るも僧室乃かゝ家時は春日明神あかりたまわたりおりほてあ人を
待て傳はせむとぞむと嘉禎かてい年中に興正菩薩こうしやう等戒律かいりつ
たえし家をなきを春日明神あかりいれむといふてびん法を起
ししる近き世は慶長乃比栞尾まきののをまきうにんてつ明忍めいにん律師りてん亦律師いりてん晋海しんかい僧伝の
自ら出家しむし何ごとをもたらぬ事おほまきと僧室しやうしつ教よ
いらずなきをいりあむと始はつて僧室しやうしつたれた人家をきくあ
まをの形のみて奈な羅らおちし春日の由社ゆしやにこそめて神かみ統とを
うを終はつた家をおりみれり乃いれちをたむるなり乃由寺ゆしや神かみ傳でん記きあり
てたゝまは世人よじんのまもる家ことなうらうは佛神ぶつじんおとらしむてあら

せたまへば百まのむのぎ法代長う傳らせむして法ありと昔よりきり
ありおりの法守がこみ御がま家おまを何まのあ家法とをなわけふ
他は國に及ぶをきりまは何とぞちん赤染れ右傳門のこの社に法
業花乃物語をえ法小法堂に蘭白乃佛法を教ひるのみ供養一
たま況考二世に法乃法切法はりてあまおけい法とて一乃法後
一法今も法は業えは世のひ法来りてあまええはをのふむの
法をうりふこそおりのまは免さまでか物物語をうまく見教に云
法像法世を才ぎてたや東法小の法はなれをあや又世に法
ちうありて一乃春日明神守王おりの法せし由や何とて三宮ハ
法是せし法ありとぞおりの法僧乃名はあまど和合僧あ

つて法の法を守りあまおむきたうと和合僧あなれを僧
室も名にせらんとぞおの由世も法教は大乗小乗とを
に受戒の前後をよめて位を定させあひ乃賢王親子も優
婆利此是を社しあまおむきひなるを法物語をえあま後
正僧却律師など名は出家れとてに似れどもおほわけあり
あま法官あて佛戒小と法源小何と法法位きき法方社出
家せはあまの唯此國今乃下あり尼寺家にそ乃法位のみ
とき法のみ法まはあの帝を恭敬社拜せさせあまはたう
南七梵天帝親天など法法を社しあまおむきあまおけい
んやあまあまの法と法おほあまのあまおけい其官に法がせ

刻くに自他其功徳を念すまなり。乃榮花れ比似し法をら
遠く法彼とひまを討をいへるあやうすもたふなぬきさきいふ
今んは純然衣錦の装束あやうすものならんみそ法乃討しき
ならん赤襟は尊あやうすおてあなをりくたき法かへ遠くまな
うめれまふはえたてこれやうおつれたるよ其威儀世間を超過し
て寂靜をぬぐふや法おらたて形見おくからん加象海衣あるも
たよ雅めて夢とく強うらよみるんよく論儀説経法教
あやうし信しつる法かへるんこまをさるみおみかたをま
ふは持律修禪おれらことなれば道徳し帰依せしめるふまれ
たのまやうおらし是ま法世出あ乃徳のおもる人し由あうかた

美白けうの法堂を建のし供養をせし終るし後世三日小法師を何
つめ念佛法もあはせの形とあ乃のまけりまは法におもしつるおれ
あはしとたうめ身せしれあはるん人由法に承乃法の出家の
すごいふまひをそし法世のありてんはらうおれからん出
家小もあは白衣小もあは佛弟子とも定うしまはあはひならん
うかうらひとゆもば老かれた法尼た口まらうと法もかめらふかまの
らあどわが故大和上雙統者法佛おらうませし法世をまびのひ
はまにその法世はらうのをたふまひまらうらうら法の世をまらう
らま法を法をわねて葉山法孫尼もた中法とあはらうら法まらう
ら法はあはらうたあしあはらうたあしあはらうたあしあはらう

此の如く海へもたすきとてあらんを希ふ形ありて佛堂殿を
 此威光にてはるる佛信小淨信ありてはるる如法此和合信室に
 入る事あるは天竺下あまの法は歸す家事もあまの法を
 其時此の如くは家恨何家こと小なむ今も猶ありむつたあは名
 此あれど慶長の後、和合信ありて佛室此世小信とてはるるひらうと
 に佛坊ありてはるる法は此の如く是れん實をまはれる法代めたる
 形らんうゝ又あ家財世尊舎婆大城小ありてはるる諸乃比丘尼小告るふ
 あく由縁五怖五罪五怨此の如く滅せに此因縁の故小計生此中身心
 無量此苦みをもつて後の世又悪る此中に落此五怖五罪五怨なるれば
 此因縁故も今生中は種々の樂をうけ後世中々天上此果処も生る

と説をばせのいさそ何等の五怖をばるる取べき一は殺生二は
 盜三は邪淫四は妄語五は飲酒なごころをたまひまはるる
 らはみたるを諸空の如く強弱律此中に義理の如き應ある
 べきとておぼやかしむるは此善法を漢たら諸と歎くふを
 端といふす愈てこれらみたるをばるる法を諸法といふ佛を
 此中の法宝と仰きまはるる南無法とてあまの如きは此強弱律此三蔵の
 中事あり此三蔵小なるて戒定慧を修し學ぶべきなるは此の三つ
 らなる三蔵はごころの如くもはるる佛は佛法此修り果の如く冷
 とぶ又強は天竺小ては修多羅といふ貫穿此義ありあまの
 きた法は此佛信小てはるるみたるをばるる如き集めて教

と為心して強ゆるはれば是て三教の法を一切強ゆるは
了して世を以て清く中道の人たるは自ら生れざるを以てせ
あふ故に鉢を以てして分衛せざるは又法寺にて食を以てせぬ
日ハ僧坊坊々をめぐりて佛堂にて住居を以てせぬは
在家を制しとて世尊は佛眼して善きことなきは
那くとも法を以てせしむるは佛堂にて住居を以てせぬは
一まはたしとて世尊は佛眼して善きことなきは
まを以てして世尊は佛眼して善きことなきは
ことばにきき容を以てせしむるは佛堂にて住居を以てせぬは
師を以てして世尊は佛眼して善きことなきは

母家にて居り根機熟しぬまは三乗を聞令して一佛乘に歸し法
けまを以てして世尊は佛眼して善きことなきは
善強を以てして世尊は佛眼して善きことなきは
まを以てして世尊は佛眼して善きことなきは
世尊は佛眼して善きことなきは
法を以てして世尊は佛眼して善きことなきは
ら法とおもひたるは佛眼して善きことなきは
下みる一佛乘のまを以てして世尊は佛眼して善きことなきは
く世尊は大慈大悲は父の如きは母の如きは佛眼して善きことなきは
はせぬは佛眼して善きことなきは

おとよ忠に成せば家ぢのちと告はせぬお世の成るのちも受
るは教も如し一切智は佛眼よ佛眼と定はせぬ以佛法を
護一居士を化度せし路の九人如しちのちも成る事
ら此のちの阿育王傳よと成るのちも成る事難き者佛
よて巷をゆりせぬのちも成るのちも二人の兒ともあり上族
姓の子を徳勝といひ次の族姓乃子を無勝といひ其の土を
以て城を治るのちも成るのちも成る事難き者佛
倉庫のちも成るのちも成るのちも成る事難き者佛
まこと名はを納められたぬ此のちも成るのちも成る事難き者佛
に此形三十二相をなせぬのちも成るのちも成る事難き者佛

うちとみる金色と成るのちも成るのちも成る事難き者佛
此兒とも此不思議をえぬのちも成るのちも成る事難き者佛
徳勝ともあり此のちも成るのちも成る事難き者佛
少きものちも成るのちも成るのちも成る事難き者佛
に合掌したるのちも成るのちも成る事難き者佛
のみ阿難者これをえぬのちも成るのちも成る事難き者佛
に今何ありて成るのちも成るのちも成る事難き者佛
おは集る二人の兒とも成るのちも成るのちも成る事難き者佛
各ちのちも成るのちも成るのちも成る事難き者佛
て輪王と成るのちも成るのちも成る事難き者佛

使^{つか}遣^{はな}さ^して^まさ^るべ^し〜^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
た^らに^おは^しま^して^おは^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
ま^はみ^まり^しる^る大^{だい}王^{わう}ま^はら^りま^して^おは^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
ひ^ひ弾^{だん}指^し指^し間^{かん}も^も徳^{とく}を^をう^うゆ^ゆ家^けこ^こを^を好^{この}む^むひ^ひ天^{てん}下^げを^をあ^あら^られ^れぬ^ぬ
は^はぐ^ぐま^ませ^せる^るは^は谷^や々^々れ^れぬ^ぬと^とま^まで^でも^も民^{たみ}此^こ法^{ぽう}め^めを^をみ^みを^を
きて^{きて}安^{あん}楽^{らく}を^をた^たげ^げぬ^ぬま^まし^して^おは^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
の^のま^ま今^{いま}何^{なに}を^をの^のお^おは^はら^らぬ^ぬま^まし^して^おは^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
命^{いのち}を^をま^まし^して^おは^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
の^のま^ま今^{いま}何^{なに}を^をの^のお^おは^はら^らぬ^ぬま^まし^して^おは^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
諸^{しよ}子^しを^をえ^えせ^せら^らぬ^ぬま^まし^して^おは^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り

こと^{こと}を^をま^まし^して^おは^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
悲^ひは^はら^らぬ^ぬま^まし^して^おは^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
と^とす^す法^{ぽう}を^をあ^あら^らぬ^ぬま^まし^して^おは^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
脱^{だつ}〜^つ後^ご小^{せう}う^うあ^あら^らぬ^ぬま^まし^して^おは^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
ら^らせ^せる^る其^{その}時^{とき}に^に世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
陀^だ者^{しや}に^に昔^{むかし}の^の淨^{じやう}飯^{はん}大^{だい}王^{わう}は^は世^せ間^{けん}に^にお^おは^はら^らぬ^ぬま^まし^して^おは^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り
な^なら^らぬ^ぬま^まし^して^おは^らぬ^らん^ん世尊^{よそん}お^はす^まに^は諸王^{しよわう}は^はら^り

のくわうらに想はしてほみえはせぬ大王は形をえてまの
らせぬととおほす難陀をうけりせぬひをに大王は
大恩の父なりのおけはして養育之恩をほりぬぬ
一室中身をせぬ世の阿難者難陀難陀者をもて
やがて神皇をとり大いにこれかろふ鳳王乃らりて
て終るべきやうなぞをえはせぬ志をこれほどに却比羅城に
ちよはし大光のを放ちぬば國中の人を家にせぬ
一たををえぬやのみをををて終るく白くする大王
憐れおもらせぬばきよくわうらに室ををてぬぬ
大王崩れ終る世の國の威名なりを傳へんこと
春六之十八

たがおきになきぬ世尊のをををて終るく
とく生死中の苦みなることをおもふ
内かにをうてまかやをををて終るく
てををて終るくわうらに室ををてぬぬ
バかうををて終るくわうらに室ををてぬぬ
はまのををて終るくわうらに室ををてぬぬ
大名王系ををて終るくわうらに室ををてぬぬ
はみ子や共はををて終るくわうらに室ををてぬぬ
これをををて終るくわうらに室ををてぬぬ

をみたりよはねき天候法をてたびりきらせる大元此火のこの
んな法を見てもいふ形事かありみ何處の世尊四元下
告はせる世間無常なる此身堅固なるにまがろくおとく
化れぬか此ほ乃ぬる中日月のあり命をたのむは汝等
諸人唯此火を見てありとおもふ諸欲此火と常にこれまた
王みなるまほ不劫をてて生死をたなはる大元系をたんとを來む
尊一坐此のまふ薪やうくはき火志のまぬれが諸王おれお
ほ之れ乳をみぶ火をけ火まえぬまきまきして居るをこひ
後金持よこふをみぬおれお塔をたたくとたをたてき
ぬる所候おほの供養一まある大元此世尊にとひまあるふ

大淨飯王今いひて小生下るふ殺之は解脱一人とせざる告めふ
父王淨飯これ持戒清淨道眼淨此今淨居天子生をうけ
ぬる大衆こまきさうきさうきといふともまこと限りまなれをいさ
のかあ一みまかなるはてはたらむおれを終つてぬまはる
かしの去きぬる世尊父帝此法孝養おふ忍なる終るをみ
又母此法た先に初利天親良園の中皮利質多羅樹たのこま
三月夏安居せしむるふことおけますふたとき世尊四元子園
繞せしむるは此の毛れれ中より千光眼を放たまひて二十
大千世界を照るのふをうつる光乃中小子葉此蓮華ありその
蓮華此中にみる化佛おとす才威光てあかやきてたふは

たごひなり 諸天子何乃縁小よりて世に生阿修羅を志願は
世尊文殊菩薩小告め小母は法をよに申す我此質多羅樹の
中よりありはて三空を執殺しよよと告られよと文殊を告めハ
至て摩耶夫人結みよとにおけりて世に一をかもあま人のれを夢
まば乳おほひのう流まのり摩耶これをも法受下て家うみまを
た係悉達太子ならば乳けたまも小母は口小至んとおたまふ時よ
支の乳けいで白蓮華れやう小なめて世を法口小の摩耶
法受下ていたう悦びのふ三子大千世界阿修羅のみをふふひ勤く
阿修羅のふいらくお妙形法花開きとる就菓就才文殊ほさつよ
かすまの世をもと母子と形めて安楽なること多しなりかき

いまの世のやうな縁こころのあつてはつての世とこれより文殊と昔よ
世を法口小のふ摩耶これをも法受下て家うみまを
して須弥山に鼓動の相れぬ梵音をもて安に告させよ小生死
界中身乃種縁起みな樂あつ苦ありまは内法涅槃を修
してもろ苦果をた形するふべと摩耶一心に五體を地り
なる世をたつて正念に住し煩惱を伏しよふ世をも法受下て
重をとりせのふ摩耶これをも法受下て家うみまを
善根純熟し八十億熾然煩惱をやぶら須陀洹は果成
はるひ世尊にやめふ才で小生死は牢獄をまぬの意は信をも同
會は大原世をもを兼至隨處異口同音にふ形ふ一切

浮提下至ぬ来久し加らぬくもに涅槃に入せるふ留しと告よと
 命トの鳩摩羅歸つて下りてこれ告めふもく人今なりと
 いたうまひの形み世尊世尊之切利天子おけしはしてはるま
 らぬお安座を降まはるまうぬくもに涅槃入るるを
 しきりたまえおけいふせん世尊眼まもく滅しぬせんも
 け家小婆等羅ふりき所天竺殊絶なる知されやうて恭敬
 勸請し其源よるし形唯形と仁者家等の為よるし之啓
 請をせせむたの程之は阿浮提結今世慈念せむるも
 やう速にわゆる降らせると鳩摩羅世尊おけしとけりつふ
 はふあふし然白しぬ世尊これききりせむし五色の光を放ち

のふてふまかや之光明らなる帝釈天王世尊此下界に降つては
 んとしぬをえぬし鬼神亦もいはせて三道たのうをまば
 摺子他のも中塔は阿浮檀金尤は瑠璃右は瑪瑙をたてあせ
 五楯楯えりまのたあふの巖のふりゆりまきつと世たなひかり
 利しむぞふ人の造たふたふば免む及たぬもそわひたうん
 一此き成ち唐北三藏乃天竺ふわらまのひけおぐらな
 ほ跡五河のふるとなる世尊摩耶おむのせむし理まをたふ
 けせのふ生死界は法あふまの心ばとるま事はりのあま今を
 ぶたふ下り又えさかぬかどに涅槃にりまは信縁をうと法を
 せらるる人摩耶いたうまの形ませぬしはあまのあまの傷を

少くせのふ新羅小とつはるふと世尊母と別まはせるひ乃宝階より
降る歸らせのふ梵天王きぬるををかひせしせのふ四天王尤右に
依立しるふ四部北大原歌唄うたの漢歎さんたん諸天原妓樂を奉おかせ大
にまろく教養おんげ焼香やうかう道行みちぎ随まにまらざるなりまらふこの
世界は波斯匿王せきしやくおうとれ諸大國王をけり光かほりきりなり紀大原
比丘比丘尼びくしやくにをみち世尊とに集りまらるをせり替首かへしう祀まつり
てむら身らせ履ふ此時須菩提すもてつ者ものは柔なるは忍ぶたをに
そ福定ふくとくぢやうの宝階たからかゝりをまらる身らせのふ蓮華れんげ色比丘尼しきひくにはひそ
きみち世尊とに替りて今もあききに拜まがしきりたるおかせせ
尼乃由にのゆすすふとは大原中おほはらなかつをわけ通とほるふによなるればおぞ

神力とんりきによりて金輪王きんりんおう世尊を現げんし七宝具足しちほうぐそく千子圍繞せんしうゐにうし帝威ていゐ
光くわうことにてすませるふ諸大國王等しよたいくわうとう此こひりにおはまると道みちを
らきてとほまあらせるは何なにお障さやりまなるはあらるは進しんと
待まちなるは世尊よかどなるは降くだりおとりては世尊よをかきはり
ららしたまひ蓮華色れんげしき小告せうこははるふ須菩提すもてつと福定ふくとくぢやうふ入いてはきよ
わらはは法ほふをを拜まつせらふのみぎとにまらりて衣え色しきをを依よ何なにお利益りやく
のはあらとてみまきあらるおはりまはらるは世尊よはは大原おほはら中なかつ
てかは原はらききををいりふめははるはなるはおかされきを優う填てん王おうの
赤梅せきばい檀だん乃のるる像ざうをを馬車ばしやににせせるは進しんみおはりまませるやらく
降くだりまらるはは馬車ばしやなるは像ざうををみみりり下くだらるはは何なに由ゆみすとた

まして佛阿を祀るふ所乃と事（んぶきまうまのり）中佛長跪合掌（ちゆうぶつちやうかいがうしやう）一（ひと）の無量の
 化佛（けぶつ）も共（とも）に長跪合掌（ちやうかいがうしやう）一（ひと）の世尊（せそん）の像（ざう）と共（とも）に（しん）の尊後（そんご）
 於世（よ）大小佛事（おほつとせうじ）成（なり）ずるも一（ひと）のわが滅度の後（めつどののち）にわがくの子子皆
 尊（そん）にふぞと一（ひと）のまゐら守（まも）りたるとかうはまはせむと事（こと）大いし出お
 け（け）奇化佛異口同音（けいけふふつゐくどうおん）にみる此佛（こゝろ）を崇（た）敬（た）と事（こと）のふこれより精
 舎（じや）にいらせるもとて世尊（せそん）の像（ざう）はまにす（ま）せむと事（こと）これふ
 尊像（そんざう）は本佛（ほんぶつ）まつす（ま）せむと事（こと）白（しろ）の世尊（せそん）又告（また）はせむと事（こと）わが
 うらぬほどに涅槃（ねはん）の徳（とく）を令（たま）ふれど海衆（かいしゆ）の利益（りやく）のほどにわが
 は世（よ）に於（お）りて未（いま）來（きた）れ才子（さいし）を養（やしやう）一（ひと）のふ危（あや）生（せい）險（けん）度（ど）に利（り）やと
 於（お）りて（ま）せば（ま）は（ま）に（ま）進（すす）むと事（こと）て（ま）ひて（ま）由（よし）法（ぽう）の（ま）え（ま）せ（ま）ひ

於（お）小（こ）の像（ざう）はまにた（ま）せむと事（こと）と事（こと）祇園精舎（ぎえんしやうしや）の（ま）入（い）勢（せい）
 の（ま）尊（そん）獅子（しし）の座（ざ）にお（り）て（ま）奇（き）四（し）危（い）圍（い）繞（じやう）一（ひと）の（ま）心（しん）
 地（ち）に（ま）恭敬（くわうけい）礼（らい）拜（はい）一（ひと）の（ま）心（しん）今（いま）都（みやこ）に（ま）西（さい）溪（せき）像（ざう）清（せい）涼（りやう）寺（じ）に
 お（り）て（ま）三（さん）國（こく）傳（でん）來（らい）赤（せき）梅（ばい）檀（だん）の（ま）像（ざう）と事（こと）と事（こと）仰（おほ）ぎ（ま）は（ま）此（こゝろ）尊（そん）像（ざう）に
 法（ぽう）事（じ）なる（ま）世（よ）尊（そん）の（ま）口（くち）於（お）りて（ま）佛（ぶつ）法（ぽう）を（ま）東（とう）小（せう）流（りやう）と事（こと）と事（こと）説（せつ）き（ま）ふと事（こと）これ
 ば（ま）也（なり）未（いま）來（きた）の（ま）佛（ぶつ）才（さい）子（し）を（ま）由（よし）法（ぽう）に（ま）重（ちやう）ね（ま）せむと事（こと）と事（こと）世（よ）尊（そん）の（ま）像（ざう）も（ま）け（ま）し（ま）て（ま）後（ご）ら
 せむと事（こと）と事（こと）佛（ぶつ）寺（じ）に（ま）像（ざう）記（き）せむと事（こと）と事（こと）志（し）願（げん）は（ま）た（ま）ら（ま）け（ま）し（ま）佛（ぶつ）國（こく）小（せう）化（け）交（かう）に
 像（ざう）お（り）て（ま）奇（き）と事（こと）と事（こと）寫（しやう）し（ま）ま（ま）れ（ま）た（ま）る（ま）像（ざう）と事（こと）と事（こと）唐（たう）土（ど）小（せう）佛（ぶつ）一（ひと）れ（ま）る
 せむと事（こと）と事（こと）佛（ぶつ）の（ま）後（ご）ら（ま）せむと事（こと）と事（こと）佛（ぶつ）か（ま）け（ま）し（ま）け（ま）は（ま）中（ちゆう）々（た）なる（ま）
 い（ま）づ（ま）佛（ぶつ）人（にん）の（ま）國（こく）小（せう）生（せい）れ（ま）た（ま）る（ま）と事（こと）と事（こと）佛（ぶつ）乃（なり）佛（ぶつ）と事（こと）

もし恭敬供養し奉らばむすも作す所のあり三業此衆
障をまぬれ現世福慧をば富貴解脱をばむすも
ぞおもひなれ世尊まむすも小國繁にむせむと告
せむを兼りよ乃中の人のれ成をけむかむも小室四種伐城小は摩
訶波闍波提大尼世も此涅槃を見むらとて涅槃にむせむ
ばならく此尼羅漢者もみる志くむし終むむひりまむも王國寺た
有學此比丘尼沙弥尼此も終りまむも又此國此王波斯匿王
かむ是はせむよ世間今もまむも終りまむも夜生れ福徳もむすも
なむもゆもむも終りまむもかまむも波斯匿王此太子を流離太子
中より可此奈耶雜事の中末利夫人此法も終りまむもに生れはせたまむも此衆

めであらてかまむも終りまむもひりまむもかまむもおれづらむせむも
たむもまむも終りまむもひりまむも流離太子をまむも終りまむも
此中にまむも終りまむもひりまむも太子也とて八千のちりまむも
却比羅城におはむも終りまむもひりまむも其此城中
に釈種講堂をたてむも此法堂七室をたてむもたむも造らむも
たむもまむも終りまむもひりまむも終りまむも法堂とてこは
天此官殿也とおはむも終りまむもひりまむも後こむもひりまむも
此後分れたるも終りまむもひりまむも終りまむも供養も終りまむも
此後分れたるも終りまむもひりまむも終りまむも終りまむも終りまむも

末利夫人毗耶雜事
小は終まんまんと

此夫人もと早族也や

かむも終りまむもひりまむも終りまむも

をてまればちとほり離欲乃人あぶ親眷我おもひよきやうしん
もくも人と同じく親族を念ぜばはれ離欲小あはれ如來は
すまに家を出るふ道俗おれくことなる大王自らのみこちをさ
ためるふ殊一のそで又何れ時をう待まると養せたる流離
王けいせめをいれてふだび勅して四兵をとれく却比羅城は向ひ
釈種をうたんとしよ世を此ことを志るしめ阿それみ念下ま
に釈種中いまご見諦なるごははるの流離王と共の合我阿そ
ば見諦のう法とあはれはとおぼくやうて却比羅城はおもひの
せたまひ多根樹園小おりま寺もろくは釈種ごま成てくひ皆
共子悦ひてせき乃法もろにまごで法夏を祀り常は威儀のこそく

坐しよあはましくは釈種は法き施ふ人多くはまごに大衆なり世尊
これを法覺とて此諸釈ははれ乃世は中族を志るしめその根性下
志くし妙法をさのせるは釈種ごまこれをもろつたまひ初果に
此はりのあはる三果三果にすみのあはる阿羅漢果を於て出家
せまはるあはるあり又は獨覺の果を及ハ菩薩れごを起し成
佛は因縁をなすはる又まご先て決定して三空に帰依しあふ有
又も後くは戒法を受るし形ごとくてみまは佛の法教を奉仰しよ
法とらしむはれえたのうは供奉人々志まはるまごのまごも此念にま
あははるまは人ふに志くごしおれくあはみはるをね仰きよらご
ふこまはるまごの淨飯大王は命くじもごもは此釈種にあり

世は才をばせしむ初より此法す。てて天社下は入まらざるあり
そのみせむこと力勇君臣事いなるびおはす。またびんごのるる
てきおはるるわらひのなるるに諸國なるるもてはるるは
一怒りて世をばせむるるるるるるるるるるるるるるるる
みる法利を得得たがひは是を社し。とるるるるるるるるるるる
子れらうに何れをばせむるるるるるるるるるるるるるるるる
おはるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
連るる者世も此法是を社し。向し。も愚人流離王四兵をばせむるる
て秋種をくたんと。此法あるるるるるるるるるるるるるるるる
かろ其衆は他方になむるるるるるるるるるるるるるるるるるる
て

羅城を鐵城とす。とるる大鐵欄をもり流離王にたよるるる
とるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
ふらなるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
らるるの世もまらるるるるるるるるるるるるるるるるるる
あつとるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
業のむるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
まばらるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
中は大西にて急流の名りたつるるるるるるるるるるるるる
のこらるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
たたまひ申ふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

此の如く好むをてあはれ家これをおもふ由急小世頌をともせりと言
はせるふゆ乃阿難者阿難者者をめてたらく此比丘分道園の
中に何の事候下と昔流離王諸親をこころおしく前此世の因縁
城説有りと言告はせる阿難者若し勅をこもて成に阿まひ之
傳へるこれより世をあらう此比丘原と昔あか乃園おちくはすその
と起る鐵杖してす履きたる親子なる命此阿難あり世ををえ
まめてはたたなきうたうはあぞごとくあまねる世を其かこころに
帝座をしき半のふあぶ流離王此知比羅城にそらく此釈種を
縁一此分道園ひきて五百の親子を磨殺のふさく分世の宿業因
縁をせよせのふあを阿それあ心候し尋れほひまた殺業をたすまひ

一むらひ今鐵杖をすするまごころいれあやと毘奈耶難事等に委う
又由乃中大魚殺し殺しおくとまひとひたう苦み大いよあをを
てなきおけびを成せは乃耐其成中の童子めておちくはを
るに大魚をころすをえておちくはびるひによあ今無上善提
を説一のあめその同業は報は頭痛をおもえさせあめこの
毎辺功德福聚をけまをのそはませばともは鐵杖してすこれ
のなるまひなり業報がんとおちくはなるまひなる此比丘星業雜業
をすてく白業を修すべしまはるに教誡おちくはす枯くふ木をれ
くあまはる悪心なるおちくはあはれこころなるまひてしきこころを家
表はるむらひも悪心をおもすなるまひも流離王ごちあめこの諸此

とせりて流離未嘗に王これをもくもりてはよむおたひし
るまじき世あしとくまのなうひたははるるをまておぼし
づらひの好苦婆羅門これを見て大王はのまらる事ありそ女門
喬答摩阿由親族跡をたぐみる大王お誅つらきれよふ
いぞうあ乃ふま恨を堪ふいだされはあことあうん怨恨悪心
おまに呪咀せしおんなるまらるをたむられとせとあうんまて大
王もその説を悪れるる池の中にいみま一柱乃樓を傳り信る座
しあま中七日たうたらをすごあせのひことゆまなる言教すごあは
はひれ帝殿ふくせまふとと養い傳ふ令してあ乃樓をつるお
おぼしつらふてはまひお人集りあひそまいたちて七日間の由料

おと作れ高かおなれがは傳りうらにのまなるぬ流離王のそ
起つらせまふと人妹女好苦婆羅門と共よあ乃きまあは
まてまはふまをたぬまもこれぬ残り五日あう三日にならぬ
あひのあしつらふらあひとあふを伝ひあむあらうまはよふや
六日まのぬ夜まのきゆけらふひひの自さうらなるまはらる事
なふ善行てあふまのまなば宮ふらうらあまをことを上す下
まひとすに形ありあつらあ中あも善あ人々は女おあひるれ
はふ帝殿ふくらあまをたぬまもこれぬ残り五日あう三日にならぬ
あどおろまかかひなつ伝ひあひのあは目あふかあひ女あて具
のまをええは知らうの女房何れは古のを集りあひので宝珠哉

捨のうに打ち取つて佛をばらまじ阿奈は小末をねわめて俄り
日ありとれの方捨つるなる佛目安珠被てらぬ運は多せらまぢ火
捨にうりてまてまゆその火高殿ふつた空をんるまくに毛えは後
了てま可捨まをなう一宮へまおと後まてらまじの大王も出ん
も一の佛人ふもあぬ後一も者まうて戸口をともて出しまあら
せは王も好苦彼安羅門も苦不困であらまてやれぬ又とまにやうる
る人も多うん一も火のまはらんままは外にあるかんとるま集あふ
もいふませま一のかせと後一まなまづつんふむらりあてた守る
後まをうもあう一も苦まなまはけびはく終り世尊は純一もふ
たせんとしれまは命をとりあふ後れ母まのたかり記をばまをん

いと老かぢりまはあまをとりあふま釋氏まをどり宿業因縁はすでお世尊
此説おつせまひとまにたなきいとねがう今此世の縁を流離太子を早
生れ見ゆ一もあつて悪口ゆつてまを發しぬ此悪口はうたかひなうり
せばはまは其の悪業はまを牙をむいぬことまあへん
一すくばらまは悪口ふりあははは社業種乃め出ぬまかたは
まびりまて大同意王まのまはませし王位をうりまをせ
あを法園をまは身まをほり回らまを此悪口も大君は法威
安かかちて君平は嫌口より出ることなぬまをまはりまは
ひ悪業は力の強まぬは世尊乃威神力力もたぬまをまを
と悪くまひまをまに流離王も此悪口のえんまをりて法園まを法

智すすらに佛名を稱せし強名をとすめて後生
佛國三界出離の結縁を形し其の宿生をなす
いふありが事方便なる事と波風をよまうとてくちん
而代のみめに起之應き事やは今世間十善代とあり
和合偕儀も形と形され三宝世にあるをいふと事いあり
いひぬを信何依は在家も出家もと事に世尊在世形に立
か層の佛戒ふらめて身口意をまめうけて佛名強名をとす
坐禅修法を毛起とせんことと事は何もほしとれ也一
まてふくは佛家をおこせばおこはるる事とせしめられ
と事をもとの層を以て難救れ宿生をなせんとてかまにたて

ひ弊風おたがれおこすことと事は何もほしとれ也一
おやまれに佛法おあり形とて後世をけしなす現世とて
お命おもをたふ金とせぬ人の多きをかへしと事いふ
おとりのことと事いふおとりの事いふと事いふと事いふ
あへてれん又何處も事目連尊者佛乃頂をおのみた
とおほしてたうおほしうたもひんれば世尊それより
あれたまのみ目連又しうたがあらはせざるはあした
せのよのうのいり色無色界までおほしたまひんれば
尊者乃頂上げはたをさす事とせんとてかまにたて
毎見頂乃徳とて中事家まことおほし尊者世をたはら

てうきんえはなるふとんとおぼしそ乃佛を志すべし神通り
修して志すおりのほ次なるは佛前して志すのふおかす
聞えさせまはた西行法師の志すべしとたは佛は
しきをまおすといふ志す進みふて他方佛土ありし
けは乃土は佛國といふ志す世をたはてしき
われ大身ありてぞありしなるを食はるなりけし同連
尊者ははして機などおぼしなるはけし腕はしに
居るひる大身を志すのふ何まにたのふはなる志す
由は善接心ありしや加衣は衣をつきたらしとぞおぼしなるは乃土の世
る同連する者に志す志すのふ此大身其小身を志して憍慢はるるを志す

大身を現トられしと勅し同連する者佛勅をうきて大形に
はるは大身を現ト神力然りしはるは乃今此大身大い
に憍慢したまひは佛同連する者志すの佛声はるは乃今此大身大い
る彼土の佛は佛教の志すに一心志すを念しとくは天竺より
衆のひる志すも又修猛菩薩志す一切を志すんとみらるる最
大利根を志すたは佛の説は志すの志すことには乃今一家
建させんと乃佛志すおりの同形は菩薩ありて此邪見はたれ家
を志すれみすといふ志す宮にもなるは乃宮に志すたは一切を
志すせまるる志すひる志す修猛菩薩此佛の表題なる志す
らむと志す傷おぼし志すて一夏九旬は間と志すひる志すは皆え

卷六之五十四

